

一八八三年六月十八日(月)

タクール、聖ラーマクリシュナ、パニハティでの大祭において

——ラカール、ラーム、校長、バヴァナートたち信者と共に

楽しいサンキールタンの集い——タクールはガウランガか？

タクール、聖ラーマクリシュナはカルカッタ郊外パニハティで行われている盛大なお祭りに来られており、大通りでサンキールタンの群れのなかに入って踊っておられる。時間は午後一時ころ。今日は月曜日、ジョイスト白分十三日、一八八三年六月十八日。

サンキールタンの群れの中で踊っておられるタクールを見るために、周囲は幾重もの人垣だ。タクールが神への愛で酔ったようになって踊っていらっしやるのを見て、或る人々は内心、あの方はガウランガの生まれ変わりではないか？[？]と思っている。四方八方からハリの名を叫ぶ声が海鳴りのように轟く。四方八方からとりどりの花が雨と降り、祝福の砂糖菓子も撒かれて、皆で拾い合っている。

ナヴァドヴィープ・ゴースワミー・プラブが先導するサンキールタンがラーガヴァ寺院の方に向かって進んでいるとき、どこからかタクールが駆け込んで群れのなかに入ってこられて、皆といっしょ

に踊っていらつしやるのである。(訳註、ゴースワミー——ヴィシヌ派の説教師の呼称)

これはラーガヴァ寺院の学者が毎年催すチンラ(押し米)の祭りである。ラグナート・ダース(チャイタニヤの弟子)が始めた大祭で、彼の後をうけてラーガヴァ寺院の学者が毎年行っている。ニティヤーナンダがある日、ラグナート・ダースに向かつてこう言ったのがこの祭りのはじまりだ——「これ、コン泥め！ お前たちはいつも家からこっそり抜け出しては、ひとりで神の愛を盗んで味わっている——私らに知らせもしないで！ 今日はお前に罰を与えてやろう。チンラの祭りをして、信者一同にごちそうしろ！」

タクールは、殆ど毎年この祭りに行かれるので、今日もラームたち信者仲間ですら祭りに行く話が出た。ラームは朝方、カルカッタから校長といつしよドフキネシヨルに南神村へ来た。タクールにごあいさつしてから、北側のペランダで食事をいただいた。ラームたちがカルカッタから乗ってきたその馬車で、タクールをパニハティにお連れしたのである。同じ馬車で、ラカール、校長、ラーム、バヴァナートほか、二三の信者たち——そのなかの一人は馬車の屋根に坐っていた。

馬車はマガジン・ロードを通り抜けてチャノク大通り(トランク通り)に入った。馬車のなかでは、タクールが青年たちを相手に何だかだとおもしろそうな冗談を言っておられた。

(パニハティの大祭における聖ラーマクリシュナの霊的高揚マハーバーヴァ)

パニハティの大祭場に馬車が着くや否や、ラームたち信者一同は仰天してしまつた。——あんなに

機嫌よく馬車でふざけておられたタクールが突然、ひとりで馬車から降り、群集のなかに走り込んでしまわれたのである！一同は必死になつて探し回つた。やつと探し当ててみると、タクールはナヴァドヴィープ・ゴースワミーの率いるサンキールタンの群れのなかで踊りながら、時々、三昧に入つておられた。三昧に入られるのを見ては、引っくり返らないように大事そうにタクールを支えているのは、ナヴァドヴィープ・ゴースワミー氏であつた。四方を取り囲んだ信者たちは、ハリの名を叫びながらタクールの足もとに花や砂糖菓子を投げている。そして、タクールを一目見ようとして、幾重にもなつて押し合い^へ押し合ひしている！

タクールは半ば恍惚として踊つておられる。そして、聖なる名を呼びながらおうたいになる――

ハリの名よんで涙を流す

あの二人の兄弟が来たよ！

自分で踊つて世界を踊らす

あの二人の兄弟が来たよ！

自分で泣いて世界を泣かす

あの二人の兄弟が来たよ！

追つても打つても神の愛を話す

あの二人の兄弟が来たよ！

(二人の兄弟――聖チャイタニヤ(ガウル、又はガウランガとも言ふ)とニテイヤーナンダ
(ニタイ)

タクールといっしょになって、周囲の人たちは狂ったように踊る。踊りながら、ガウルとニタイの兄弟がいまここに踊られて踊っているような感じにおそわれている。

タクールはまた、おうたいになる――

ゆらゆら、ゆらゆら、河の上

ガウルの愛の波が立つ

サンキールタンの波はラーガヴァ寺院の方角に向かって進んで行った。そこで踊りながら寺を巡り、それから、ラーダーとクリシュナの像の正面で拝礼してから、ガンジス河畔に住む旦那方が建立した聖ラーダークリシュナ寺院に向けて、この大波のような大群集は押し寄せて行った。

聖ラーダークリシュナ寺院には、サンキールタンの群集のうちほんの一部が内部なかに入れただけで、残りの大部分は戸口の外にひしめきあって何とか内部をのぞき見ようと苦労していた。

〔聖ラーダークリシュナ寺院境内での踊り〕

タクールは、聖ラーダークリシュナ寺院の中庭で再び踊っていらつしやる。キールタンにすっかり

酩酊めびでいされたようなご様子だ。時々三昧に入られる。相変わらず、四方から花や砂糖菓子が足許に落ちてくる。ハリの名を唱える声が中庭いっばいにひびき、そのひびきが表の大通りに届いて、そこにひしめいている数千の群集がいっしょに唱和するのだ。聖なるガンジスの河面を往來する大舟小舟の人たちも驚いて、この海鳴りのようなハリを呼ぶ声を聞いていた。そして、自然に自分たちの口からも、
 ♪ハリポロ♪ハリポロ(神の名となえよ)と発音していた。

パニハティの大祭に集まった数千の善男善女は、この靈的偉人の中に、たしかに聖ガウランガが顕現しているのを感じ取っていた。二、三の人たちは、この方こそ聖ガウランガの再誕(化身)に違いないと思つた。

狭い中庭には、大ぜいの人間がぎっしり詰まってしまった。それで、信者たちは精一杯注意しながら、タクールをそつと外に連れ出すことに成功した。

〔マニ・センの居室における聖ラーマクリシュナ〕

タクールは信者たちといっしょに、マニ・セン氏の居間に入ってお坐りになった。このセン氏は家族共々パニハティに住んで、聖ラーダークリシュナ寺院マニの管理をしている人物である。この家族が、いまは毎年の大祭の準備万端を整え、タクールをご招待していた。

タクールが少し休憩されてから、マニ・センと彼の師グールであるナヴァドヴィープ・ゴースワミー師は、タクールを別室にお通しして食べ物ナヴァドヴィープを差し上げた。しばらくしてから、ラーム、ラカール、校長、バ

ヴァナートたちもその同じ部屋に通された。タクルルの信者思い——ご自分は立ったまま、いかにも嬉しそうに彼等に食べさせていらっしやる。

ナヴァドヴィープ・ゴースワミー氏に対する教訓

聖ガウランガのマハーバーヴァ、プレーマ、および三つの境地

午後、ラカールやラームたちとタクルルは、マニ・センの居室に坐っていらっしやる。ナヴァドヴィープ・ゴースワミーは食事をすませて、少し休んでから応接間に入ってきてタクルルの傍に坐った。

マニ・セン氏が馬車賃を献上しようとした。そのとき、タクルルはゆったりとした椅子に坐っておられたが、こうおっしゃった——「馬車賃は、ラームたちが受け取らないだろう？ あれたちは稼いでいるのだから」

やがてタクルルは、ナヴァドヴィープ・ゴースワミーと神に関する話をお始めになった。

聖ラーマクリシュナ「信仰がすすんでくるとバーヴァだ。そのあとがマハーバーヴァ。そのあとが^{プレーマ}愛だ。そのあとで本質^{もと}(神)をつかむ。

ガウランガはマハーバーヴァとプレーマだった。

この愛^{プレーマ}が生まれると、世界のことなんかすっかり忘れてしまう。そればかりか、この馴染み深い自分の肉体のことまで忘れてしまう！ ガウランガはこうした愛の境地にいた。海を見てヤムナー河だと思つて飛び込んでしまった。

普通の人間は、マハーバーヴァ^{フレイマ}や愛の境地にはならない。せいぜいバーヴァまでだ。そのほかに、ガウランガは三つの状態になったというが、そうだったね？」

ナヴァドヴィープ「はあ、そうでございます。深奥の境地、半意識の境地、意識の境地でございます」
聖ラーマクリシュナ「深奥の境地で、あの方は三昧におなりだった。半意識の境地では、ただ踊ることができるだけ、意識の境地で称名讃歌をなさった」

ナヴァドヴィープの息子が入ってきてタクールに紹介された。まだ年若く、聖典を学んでいた。入ってきてタクールにごあいさつ申し上げた。

ナヴァドヴィープ「家で聖典を勉強しております。この地方では、ヴェーダの写本を手に入れることはできませんでした。マックス・ミュラーが翻訳出版してくれましたので、読めるようになりました」

〔学問と聖典——聖典の核心をさとれ〕

聖ラーマクリシュナ「お経や聖典をあんまり研究しすぎると、かえって害になるよ。聖典の一番大切なところをつかまえないけりゃいけない。そのあとはもう、書物^{ほん}なんて何の必要もない。肝心かなめな場所がわかったら、底深く潜^{もぐ}っていくことだ。神様を我が手でつかむためにね！

わたしは大実母^{ママ}に教えていただいたよ——ヴェータータの核心を。ブラフマンは真実、世界は虚構^{うそ}。ギター^{ギター}の核心は、十回ギターを繰り返せばわかる。つまり、テヤーギー・テヤーギー(捨離だ)「ナヴァドヴィープ」テヤーギーは正確ではございません、ターギーでなければ。それでも同じ意味

になります。最初にタグという語源があつて、それがタグとなりまして、そこへ「イー」がつきましてターギーとなります。チャーギーの意味もターギーと同じでございます」

聖ラーマクリシュナ「ギーターの一番だいたいな教えはこういうことだよ——それ、人間たちすべてを捨てて神をつかむために努力修行しろ」と

ナヴァドヴィープ「捨離の方に、どうしても心が向かないのですが？」

聖ラーマクリシュナ「あんた方はゴースワミー（説教師）だ。あんた方には神殿での役目がある——あんた方がみんな捨離したら、神殿の行事ができなくなるよ。いつたい、誰がすればいいのかね？ あんたたちは心で捨離すればいい。

みんなを指導するためにあんた方を世間に置きなすつたのは、ほかならぬあの御方なんだよ。だから、千遍も決心したつて世間を捨てることはできない。世間で仕事をしなければならんような性質を、あの御方があんたに下すつたのだからね。

聖クリシュナはアルジュナにおっしゃつていた——『戦争をしたくないって、君、何を言うのかね？ 君がどんなにそう願つても、戦争から逃げることはできない。君の生まれつきの性質が、君に戦争をさせるのだから』

〔三昧境のタクール——ゴースワミーのヨーガ（神との合一）とボーガ（苦業の経験）〕

聖クリシュナとアルジュナの話がされている間に、タクールは再び三昧にお入りになった。見る見

るうちにお体は不動になり、目は虚ろになった。

呼吸もあるのかないのか分からぬ程になった。ナヴァドヴィープ、息子、信者たち、皆、驚いてその御姿を拝見している。

半ば平常に戻って、タクールはナヴァドヴィープに話しかけられた。

「ヨーガとボーガ(苦業の経験)、あんなのような説教師たちにはこの両方がある。

この段階では、ただ一生懸命祈ることだよ——『神様、あなたの世にも魅惑的なマヤーの力と富は、私にとっては要らぬものです。私はあなたが欲しいのです』と。

あの御方は、確かにあらゆるものの中にいらっしゃる——そうすると、神の信者とはどういう人をするのか? あの御方の中に住んでいる人、心も、命も、魂も、すべてあの御方に捧げている人だよ」

タクールはやつと、すっかり平常の意識になられて、ナヴァドヴィープに向かって話しておられる。「わたしがこういう状態(三昧)になるのを、病気だと言う人もある。わたしは言うんだよ——『その意識が世界中の意識になっている。それを想っていて、誰が無意識になるものか』とね」

マニ・セン氏は、招待したバラモンとヴィシヌ派の人々に、それぞれ一ルピーか二ルピーをおくって別れのあいさつをした。

彼はタクールに五ルピーの金を捧げた。すると、聖ラーマクリシユナはこうおっしゃった。

「わたしは、金は受け取らないよ」

マニ・センはそのまま引き下らずに、どうしても受け取って下さるようにと言い張った。

タクールは今度は、「お前のグルの名誉にかけて、わたしに金などくれるな」とおっしゃる。それでもなお、マニはしつこくお願いした。タクールはほとほと困り切つて校長にお聞きになる——「どうしても受け取らなけりゃならんのかな」校長は断固として、「いえ、とんでもない。決してお受け取りなさいませぬ」

マニ・セン氏の友人たちは、ではこれで、マンゴーやお菓子(サンデシユ)を買つて差し上げて下さい」という名目でその金をラカールに手渡した。(訳註、サンデシユ——ミルクとさとうで固めた乳菓)

聖ラーマクリシユナは校長に向かつて——「わたしはグルの名誉を守つた——ホツとしたよ。受け取つたラカールが、今度は荷を背負つた」

タクール、聖ラーマクリシユナは、信者たちと共に馬車に乗つて南ドツキネーシヨル 神寺院にお帰りになった。

〔無相の实在かみの瞑想と聖ラーマクリシユナ〕

途中にマテイ・シールの神殿がある。タクールは大分前から、校長に頼んでおられた——「いっしょに、あの神殿の庭にある池を見に連れて行つてくれ——無相の实在を瞑想する方法を説明してやりたいから」と。

タクールは風邪を引いておられるので、皆がお伴をして馬車をお降りになった。

神殿では聖ガウランガの礼拝供養をしていた。夕暮れにはまだ少し早かった。タクールは信者一同と、聖ガウランガの像の前で床に額ぬかずいて礼拝をなさつた。

1883年6月18日(月)

そして、神殿の東側にある池のガートに來られ、ゆつくりと池を眺めていらつしやる。池の魚は誰をも恐れず、ムリ(塩味のボン菓子)などを投げてやると、大きい魚が群れをなして寄つてきてはパクパクと呑み込むのである。そしてまた、いかにも楽しそうにノビノビと水の中を泳ぎ戯^{たむ}れているのだ。

タクールは校長に話して下さった――

「この魚の群れの様子を見てごらん――丁度こんなふう^{テゲイナゲ}に、至高意識の大海で、この魚のように歡喜^{よろこび}に満ちて泳ぐことだ」